

絶望

死を忘れること
その容易さと微笑

生を忘れること
その容易さと、さまよう視線

光に反射して回っているもの
銀色の
艶やかなに震える弦に寄り添い身をのけぞらせるもの

叫びのない拳が床を打つ
孤独ではなく
奴隷でしかない者

営み、という言葉を感じていた
律動、そして陶酔
こみ上げてくるものが感動だ、と

暮らし、という言葉を感じていた
テーブルを囲み
夕べに帰る毎日を

私は鋸を握る
捻じり切ることも
折ることもできないから

もはやそこには
飛散するだけの力もなく
横たわるそばから流れ出てゆくのみ

赤く錆びついた金属
その赤茶けた粉に浸み込む——
今はじめて、その存在を知る気がする

苦行ではない
淡々に行える自分というもの
絶望が骨となって支えているもの・・・

新たな何かが始まる
そのことだけは確実だ

そして、過去を問われたとき
私は答えるすべをもう持たないだろう

(2011.8.28)